

PA-078

手術を受けた超高齢者への看護ケアで回復がみられた一事例

高槻赤十字病院 看護部

○尾崎 真理子、山形 美紀、森 真理子、秋山 由衣、鹿野 瑠美、原田 かおる、石 典子

【はじめに】高齢者は手術により合併症を併発し回復が困難となることが多い。今回、超高齢者の周手術期において、看護チーム間で統一したケアを実施し元の状態まで回復することができた事例を報告する。

【目的】手術を受けた超高齢者の看護ケアとその結果を振り返り対象の回復を促進した看護師の関わりを明らかにする。

【方法】実施したケア、対象の反応を整理し、その経過に沿って看護師の考えや思いを抽出。それを基に実践したケアとチーム内の連携に着目し看護の意味づけをした。

【事例紹介】90歳代女性、要介護度4、腹部膨満で救急受診し腸閉塞と診断され手術。

【倫理的配慮】本人と家族へ研究の概要等を説明し同意を得た。本研究は当院倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】生命の危機的状況にある対象に対し、看護師は全身管理と合併症予防を行った。その後、循環動態が安定し早期離床のため車椅子乗車を促すが傾眠傾向、むせ込みがあり食事が進まない状態であった。そこで活動と休息の調整、服薬方法の工夫等を検討。また家族から生活行動の情報を得てケアに活用。チーム間で統一したケアの実施のための工夫をした。これらのケアにより食事時間に覚醒しむせ込みなく食事が摂取できるようになった。さらにケア時には必ず本人の意思を確認し実施することで意思表示の場面が増えた。家族より入院前の状態に回復したとの言葉を得て在宅退院となった。看護師は術直後には回復に対し諦めの気持ちでいたが、ケアを進める中で対象の変化に驚きと喜びを感じ、日々変化する様子から在宅復帰への希望を持つようになっていた。

【考察】高齢者の特徴を捉え意思を尊重しつつ、個別的なケアを統一して実践したことで、対象の回復力を促進できたと考える。

PA-079

ICUにおける早期リハビリテーションを阻害する因子の検討

福岡赤十字病院 ICU/CCU

○阿部 将之

研究目的 ICU/CCUに入室する患者が効果的にリハビリを実施する際の阻害因子を明らかにする。研究方法当病院ICU/CCUに入室された挿管中の患者で、なおかつ、入室期間が14日以上を対象とし、患者のリハビリが中止に至った経過をカルテや本人から情報収集を行った。

結果対象患者：A氏 70代 男性診断名：心不全 気管支喘息 感染性心内膜炎リハビリテーションの実際入院早期よりリハビリが実施されたが、リハビリ実施率は50～81.8%と効果的なりハビリが実施できていなかった。また、リハビリが実施できなかった理由として発熱、血圧低下、検査、治療、リハビリスタッフの不在が挙げられた。その中で、リハビリ中止の理由として多かった理由は、発熱と治療であった。考察入院初期に効果的なりハビリを実施することができていなかったが、鎮静を実施しており、カテコラミンによる血圧維持、挿管チューブやAライン等の生命に直結するルートによる拘束により実施できなかったと考えた。また、患者の苦痛除去や安楽の為に鎮痛薬や鎮静薬が投与されており、鎮静の深度を調整しながら、リハビリを行うのは高い知識と技術が必要とされる。これらの過鎮静や生命に直結するカテーテルによる拘束が阻害因子として考えられた。最後に、治療や看護ケア等によりリハビリが行えなかった例も多くみられた。医療者間のコミュニケーションをとり、リハビリ時間の変更ができれば継続的に実施ができたと考えた。

結論 今回の症例より、リハビリを阻害する因子として以下の3点が考えられた。1.鎮静 2.生命に直結するカテーテル類による拘束 3.医療者とのコミュニケーション不足

PA-080

救急病棟における在院日数短縮に向けた2日目カンファレンスの定着

高知赤十字病院 看護部

○野村 かおり

【はじめに】夜間の救急患者の受け入れに伴い、平均在室日数3.5日実病床回転率を上げる中で看護の質の保障と在院日数の短縮に向けて、2日目カンファレンスの定着に取り組んだ。

【活動内容】重篤化回避・合併症予防の為の翌日カンファレンス率100%、看護の質の保障と在院日数短縮を目標にテンプレート作成、カンファレンスの定着に取り組んだ。1)テンプレート作成問題点の明確化、重点的に関わりが必要なケアの抽出、療養支援の方向性を網羅できる内容とし、7項目のテンプレート作成をした。その結果、カンファレンス内容の相違の解消、ケアの視点の統一、入院・転入翌日からの療養支援開始という結果を得た。2)カンファレンスの定着カンファレンスの主旨をスタッフに周知し、実施に向けて取り組み100%の実施率を得た。多職種と協働して関わりが持てるカンファレンスを実施出来た。3)ケアの変化テンプレートを使用する事で現症状からケアの問題点の抽出ができるようになり、統一した視点で対象を捉えたうえで、多職種と現状に即したケアの展開ができるようになった。また、早期から療養支援看護に取り組むことができるようになり、療養支援計画書の作成も大きく上回った。脳卒中患者は病日6日目までに連携バス入力の徹底を行い、転院調整開始に持ち込むことが可能となった。連携バス使用患者の家族の意向や方向性の確認は、入院当日あるいは転入2日目までに実施できた。

【考察】テンプレートの作成により検討すべき内容が網羅できることで、情報共有と患者の全体像の把握が可能となった。カンファレンスの充実は一貫した看護ケアを導き出すとともに、全スタッフが療養支援の必要性を理解し、早期退院の視点を持つこと、在院日数の短縮化への意識づけが定着してきたと考える。

PA-081

ICLS トレーニングによる質の高いCPRによって自力歩行で退院できた一事例

姫路赤十字病院 看護部

○西岡 真美、清水 智恵、深山 美紀、今川 真理子

当院のICUは心臓血管外科の立ち上げで、病床数を2013年から10床に増床し、人事異動などで看護人数の増員と変更があった。看護スタッフが大幅に変化し、看護師経験年数平均7.3年に対してICU経験年数は2.69年となっていた。そのため重症患者への治療と看護に慣れないスタッフが多くなっていた。集中治療が必要な患者は年々増加傾向にあり、質の高い看護と技術・判断力が求められていたが、重症患者への対応に慣れていないスタッフが増えたことで、急変時のコミュニケーション不足や医師への報告と初期対応の遅延が見られるようになっていた。初期対応中に医師から「薬剤や物品の準備が遅い」「もっと早くして」と指導を受けることもあった。BLSやICLSの方法を知っていても、急変時に何をすれば良いか分からず動けなくなってしまうICUスタッフの現状から、ICLSインストラクターを中心に、スタッフに対してのICLSトレーニングを開始した。年間15回以上のトレーニングを実施することで、スタッフが初期対応の知識を再確認でき、質の高いCPR技術を患者に提供出来るようになることを目標とした。その結果、一般病棟でCPAとなり、発症から自己心拍が再開までに45分間のCPRを要した、腎生検入院前日の50代の女性に対し、トレーニングの成果を生かし、質の高いCPR技術を提供出来たことで、数ヶ月間で入院前に近い状態にまでADLが回復。自ら化粧をし、笑顔で歩行退院することに繋がったので、その経過について報告する。

一般演題
(ポスター)
10月17日(金)